

[nasal] の音節末における分布

— フランス語およびポルトガル語の性・数交替形からいえること —

桑本裕二 (くわもと・ゆうじ)

秋田工業高等専門学校

kuwamoto@akita-nct.jp

本研究は、音韻素性[nasal]の分布の特徴について、フランス語およびポルトガル語の名詞諸形の分析を通して考察したものである。特に音節末での [nasal] の出現に関して注目し、後続のオンセットなしの音節の後続をみた場合の再音節化の状況を、他の子音の場合と比較し、[nasal] の特異性、さらには sonority に関して /l, r/ などの流音との異同について考える。

分析に関して、フランス語とポルトガル語を用いたのは、以下の理由による。音節化に際して [nasal] が coda として分析されれば、通常 /m, n, ŋ/ のような鼻子音として現れるが、nucleus の一部として分析されるか、floating feature として先行する母音や半母音と結びつけば、鼻母音として現れることになる。フランス語、ポルトガル語にはこのような鼻母音が豊富に存在し、それらが名詞の男女形交替、複数形形成などにおいて現れるとき、複雑なふるまいを示す。フランス語には4つの鼻母音（いずれも単母音）があり、また、ポルトガル語には5つの単母音の鼻母音に加えて、二重鼻母音とよばれる、二重母音の鼻母音化を示す特徴的な音が存在する。これら2つの言語のそれぞれの分析結果を対照することにより、[nasal] のもつ特性に関するより一般性の高い指摘を行うのをこの研究の目標としたい。なお、ここでいうポルトガル語は特に断らない限りはブラジルポルトガル語のことをさす。

フランス語に関しては、冠詞 (un / une [œ̃ / yn])、名詞 (américain / américaine [amerikɛ̃ / amerikɛn]) “American, m/f” のような例に音節末（語末）で男女形交替による [nasal] の鼻母音／鼻子音交替がみられる。一方、他の子音の場合は、étudiant / étudiante [etydiã / etydiãt] “student, m/f”, gros / grosse [gʁo / gʁos], “big, m/f” のように、基底で存在するとされる語末子音が出現するかしないかという、Ø/C 交替をみせる。後者の説明として、Paradis & El Fenne (1995) は男女形にそれぞれ異なる skeleton を想定し、男性形では語末子音と結びつくべき slot が存在しないためにそれが削除を受け、女性形ではその slot の存在により語末子音が存在できるという説明を行っている。ところが、語末が鼻音である前者の例では、鼻母音

／鼻音の違いはあるものの [nasal] は削除されない。本研究ではこの現象について Optimality Theory を用いた場合、MAX 制約などの忠実性を示す制約に関しての鼻音とその他の子音の差異を明示する。これは、[nasal] は母音と融合できて、その場合鼻母音になるのに対して、他の子音では母音との融合はきわめて難しいこととも関連している。流音では例えば、単数／複数交替形に、cheval / chevaux [ʃəval / ʃəvo], “horse, sg./pl.” などがあり、この場合は語末の [l] は後期ラテン語からの通時的変化の中で [u] への母音化が考えられる (Morales-Front & Holt 1997)。また、soleil [sɔləj] “sun”, travail [tʁavaj] “work” などの、綴り字 {l} が半母音 [j] として出現することとも関連していると考えられる。

ところで、男性形で出現しない語末子音は、後続する語が母音で始まっている場合、つまり onset のない音節が後続する場合には、petit ami [pə.ti.ta.mi] “boyfriend” のように再び出現する。これは、最適な音節として onset を要求する ONSET 制約に従うものである。語末が鼻音である場合は、un étudiant [œ.ne.ty.di.ɑ̃] のようになって、後続音節の onset として再音節化される一方、もともとの鼻母音も保持されている。これは、入力形が鼻母音だった場合の IDENT 制約が [nasal] が関わる場合、他に比べて強く働くことが考えられる。また、une école [y.ne.kɔl] “a school” で鼻母音が出現しないことから、出力形として鼻母音がより最適なものと見なされるというよりは、入力形との忠実性により深く関連しているといえる。上の un étudiant [œ.ne.ty.di.ɑ̃] の例では [nasal] は第1音節と第2音節に対して両音節的になっているが、他の子音の場合で、avec — avec elle [a.vek — a.ve.kel / *a.vek.kel] “with her” のように、同じ環境では両音節的にならない。この両者を比較すると両音節性に関しても、鼻音と他の子音との違いは明らかとなる。

ポルトガル語に関しては、男女交替形で、irmão / irmã [irmãw̃ / irmã] “brother / sister” のような単鼻母音／二重鼻母音交替ともみえる交替がある。Morales-Front & Holt (1997) による Optimality Theory を用いた分析では、アクセントのある音節が bimoraic であるという Weight-to-Stress 制約や、構造を複雑にしない *STRUC(ture) 制約、1 対他対応を許さない *M(ultiple) C(orrespondence) などの制約で説明している。これを、上記のフランス語の男女形交替と比較した場合、coda 位置での [nasal] の安定性、母音と融合して鼻母音となれるかの程度の差、アクセントとモーラ、音節構造との関係、鼻音のモーラ性 (ポルトガル語では coda の子音はモーラを持たない) など、様々な差異を指摘することができ、そのことによって、鼻母音 (単母音、二重母音も含む) と鼻音の音節内でのふるまい方の違いを明示することができる。

さらに、単数／複数交替において、-ão [ãw̃] で終わる単数形に対し、(1) irmão => irmãos [irmãws̃] “brothers”, (2) patrão => patrões [patrõjs̃] “patrons”, (3) pão => pães [pãjs̃] という3種類の異なる複数形成がある。これらの単語については、ラテン語にさかのぼればそれぞれ (1) -an+o (2) -on (3) -an となっていて、それぞれが元になって現代ポルトガル語の複数語尾 -s がさらにつく形で異なる複数形が実現されると説明される。Morales-Front & Holt (1997)

は、これらの差異については **Optimality Theory** を用いて分析しており、特に、二重母音の後部要素が高く出るのか [w̃] 低く出るのか [j] については、先行母音 [a / o] の [-/+ high] に同化するのか、後続子音 [s] の [+high] に同化するのかに依存し、それぞれ **V-agreement**, **C-agreement** という制約を設定し、それらのランキングでおおむね説明している。これら交替形諸形の例で注目すべきことは、入力形の鼻子音が半母音化 (**gliding**) していることで (例えば /n/ =>[w̃])、これはフランス語の場合で [nasal] が単独でセグメントとなることなく先行する母音を鼻母音化することとは一線を画している事象であるといえる。ポルトガル語では、上述した鼻音の同じ環境の /l/ が [i] へ母音化する例がある。例えば、*animal* / *animais* [animat / animais] “animal”, *fossil* / *fosseis* [fosit / fosseis] “fossil” など。これらは、**sonority** が同程度に高い鼻音・流音のもつ共通性であると指摘できるとともに、フランス語の同種の *cheval* / *chevaux* [ʃəval / ʃəvo] の例からは、フランス語の場合は鼻音と流音は同じく **sonority** が高いにも関わらず音節化に際しては異なるふるまいをしていると指摘できる。

[参考文献]

- Morales-Front, A & D. E. Holt (1997) “On the interplay of morphology, prosody and faithfulness in Portuguese pluralization,” in F. Martínez-Gil & A. Morales-Front (eds.) *Issues in the Phonology and Morphology of the Major Iberian Languages*, Georgetown University Press, Washington D. C., 393-437.
- Paradis, C. & F. El Fenne (1995) “French verbal inflection revised: Consonants, repairs and floating consonants,” *Lingua* 95, 169-204.